

「モネ 睡蓮のとき」展

国立西洋美術館（上野公園） 24. 10. 05～25. 02. 11 京都・豊田市に巡回

本展は、世界最大級のモネ・コレクションを誇る「パリ・マルモッタン・モネ美術館」の厳選「約 50 点」に、国内所蔵品「約 20 点」を加えて、睡蓮の池を描いたばかりを配した展示室で「モネ」の世界に浸ることができる。

楕円形に配した展示室では、画伯「モネ」(1840～1926)の晩年の制作に焦点を当て、“印象派を超えた「モネ」の芸術の豊かな展開をたどる”企画である。

「モネ」が 40 歳を超えて移り住んだジヴェルニーの終わりの棲家で生みだされたのは、自らが丹誠を込めて造った庭を描いた睡蓮の咲く池であり、《睡蓮》の大画面の絵画に囲まれる展示空間を最後まで追求し続けたとされる。

展示されている作品は、最初期の貴重な作例から見る者を没入体験へといざなう大画面に至るまで、《睡蓮》の奥深い世界を通して巨匠「モネ」の晩年の制作の核心に迫る内容である。印象派を代表する画家のひとりである「モネ」は、一瞬の光をとらえる鋭敏な眼によって、自然の移ろいを画布にとどめたが、晩年になると諸々の事情で、芸術はより抽象的かつ内的なイメージに変容していく。そのような中で、画伯の最たる創造の源となったのが、自邸の庭に造られた睡蓮の池に、周囲の木々や空、光が一体となって映し出された水面であったとされている。



クロード・モネ 《睡蓮、夕方の効果》 1897年 油彩/カンヴァス 左図

作品は、画伯の 8 点習作の 1 点で、自宅地下の部屋に数年間置き忘れられていたが、再発見されたのを機会に新たな連作に挑戦をしたとされる。

クロード・モネ 《睡蓮》 1914～17年 油彩/カンヴァス 中図

中央の黄色がかつた水部分は、右上と左下を分かちながら対比させ、右上の睡蓮はピンクと黄色、左下は緑と黄色が支配的で青は両部分に共通している。

クロード・モネ 《睡蓮》 1907年 油彩/カンヴァス 右図

睡蓮、水鏡に映る樹木と空が見事に完成された絵画空間で、夕陽によって逆行となる画伯のお気に入りの構図で描かれている。